第23回 少年の主張　鏡石町大会

８月６日㈮、町図書館で第 23 回少年の主張鏡石町大会が開催され、小学生４人、中学生３人が出場し、日ごろ感じたことや考えていることなどを発表しました。

最優秀賞は、小学生の部は面川瑶青さん（鏡石二小６年）、中学生の部は児島柚乃さん（鏡石中３年）の２人が受賞しました。また、藤井史織さん（鏡石一小６年）、坂本紗都音さん（鏡石中２年）の２人が優秀賞を受賞しました。中学校の部に出場した３人は、県大会に推薦されます。最優秀賞を受賞した２人の作品を紹介します。

「言葉をこえて」

鏡石二小6年　面川　瑶青（たまお）

五年生の三学期。私たちのクラスに初めての転校生がやってきました。しかも、外国から！その女の子は、フィリピンからの転入生でした。

始業式の日、転入生は、一生けんめい勉強してきた日本語であいさつをしてくれました。でも、それ以外の日本語は分からないようでした。その子はとても緊張しているように感じました。その様子を見て、私は、（きっと日本の学校生活を不安に思っているにちがいない。早く友達になって、安心させてあげよう。）と考えました。

私は英語が苦手な方なので、英語辞書を買ってもらい、単語を調べながら話すことにしました。最初は自分の言いたいことがうまく説明できませんでしたが、彼女は根気強く私の話を聞いてくれました。そして、話が通じたと感じることが増え、話すことがどんどん楽しくなっていきました。

それから約一か月後、六年生を送る会の準備を始めることになりました。私たちは、転入生が好きなアイドルグループの曲に合わせてダンスをすることにしました。私はその子と同じチームになって、いっしょにふりつけを考えていきました。今まで通り、辞書を使い、通やくしながら練習をしていきました。彼女も、少しずつ日本語が分かるようになり、いろいろなアイデアを出してくれました。でも、送る会が近づくにつれて、私には余ゆうがなくなってしまったのです。提案されたふりつけをまとめることで時間がなくなってしまったからです。他のチームのダンスは完成してきていて、あせりからイライラがかくせなくなりました。転入生の意見を通やくすることもなくなり、ついに、その子が話していても、「もういいよ。」ときつくあたるようになりました。彼女の笑顔が少なくなっているのも分かっていましたが、自分の気持ちをコントロールすることができませんでした。

私は家でも不機嫌な態度で過ごしていました。そんな私を見て、祖母がはっきり言いました。

「あなたは自分の気持ちが伝わらなくて、自分だけがつらいと思っているみたいだけど、友達だって、あなたに気持ちが伝わらなくて苦しんでいるんじゃないの。」

私ははっとしました。「彼女には、私に言いたいことがたくさんあったはずだ。それを日本語で説明できなくて、もどかしい気持ちだっただろう。きっと言いたいことがあってもがまんしているにちがいない。それでも、あの子は、私の話を最後まで聞こうとしてくれていた。」私は、自分の気持ちをわかってもらおうとするだけで、相手の気持ちを考えていないことに気づいたのです。「転校してきたばかりの友達を支えてあげよう。」そう考えていた気持ちをすっかりわすれていた自分をはずかしく思いました。

それから私は、その子がどんな気持ちで話しているのか、想像しながら聞くように心がけました。私の気持ちが伝わったのか、彼女も以前より日本語やジェスチャーでたくさん話そうとしてくれるようになりました。すると、この友達は私の計画が不満なのではなく、みんなの発表がよくなるために私に意見を伝えているんだ、ということが分かったのです。ふたりに笑顔がもどり、「今、心が通じ合ったな。」と思うことも増えてきました。そして、六年生を送る会では、練習の成果を出し切り、最高のダンス発表にすることができました。

私は、この体験から、たとえ言葉が通じなくても、相手の気持ちを理解したり、自分の気持ちをわかってもらったりすることができることを学びました。言葉をこえて、心が通じ合うには、お互いが相手の気持ちを想像しながら言葉を伝え合うことが最も大切だということを知ったのです。

「今こそ感謝を」

鏡石中3年　児島　柚乃（ゆの）

「学校遅れるよ。」

母は、私に大きな声で言った。一年生の時は、今よりもかなり早い時間に家を出ていたのに、気づけば登校時間は、どんどん遅くなる一方で、ついには、母親の大声が、ぎりぎり遅刻を免れる唯一の手段になっていた。

いつからこんなことになってしまったのだろうか。

中学生になってからは、部活動や定期テスト、様々な行事、自分にとって新しい出来事が次から次へやってきて、時間は、あっという間に過ぎていった。正直、ついていくのがやっとだった。もう少し、正直に言えば、惰性でここまで来てしまったような感じだ。私の中学校生活は、「やらされ感」ありありの毎日だった。母に起こされ、やっとのことでたどりついた学校にも、意義を見いだせない自分がいる。私は、そんな中学生だった。ついこの間までは…。

そんな私に転機が訪れたのは、三年生になってからのことだ。部活動の引退。このことが、私の感情にある変化をもたらしたのである。それは、感謝の気持ちだったんぜか、それまで気づかなかったことに気づいたのだった。

「自分っていろいろな人や物に支えられて生きてきたんだな。」ということに。

私は、この三年間、壁にぶつかったり、悩んだりすることが度々あった。そんな時、私を助けてくれたのは、周りの人々だった。そのときは、あまり分からなかったのだが、今思えば、私の生活には、多くの人たちの関わりがあったことに気づく。

例えば、部活動の大会での送り迎えや弁当の準備。そんな時支えてくれたのは誰か。修学旅行はどうだろう。今年は、特にコロナウイルス感染症拡大の影響もあって、行くこと自体が難しい状況にあった。それでも私たちが新潟に行けたのは、自分の力ではない。保護者、先生方や旅行会社の方々、バスの運転手さんなど、多くの人の支えがあって初めて実現したことである。こうやって私たちがより良く学校生活を過ごせてこられたのは、日々を支え、私たちを見守ってくれる存在がいるからなんだと思う。周りの助けや支えがあるから、どんな困難も乗り切って、今ここにいられるのだろう。

そして、今は中学校生活も終盤戦に向かっている途中であり、この三年間同級生として同じ学校で過ごしてきたみんなといられる最後の期間だ。

友達と話しながら帰る放課後も、ばかなことを一緒にできる親友も、和気あいあいとした自分のクラスも、あと半年後には、皆それぞれ自分のもつ「進路」に向かって歩み出していく。人生の分かれ道とも言える程のこの大事な時間。今までずっと一緒にいた友達も卒業後には離れることになる。決して縁が切れるわけではない。しかし、それぞれ新しいところで新しい友達ができると考えると、こうやって毎日会う友達とはどうしても疎遠になってしまう。そう思うと少し寂しく感じられる。私は、一人ではなかった。朝起きてから、寝るまで、あらゆる人々との関わりの中で生きている。これが今の私を作っているのだ。

当たり前に感じていた毎日から自分を支えてくれるかけがえのない人たちがいることに気づくことができたのは、この三年間で自分が成長できた証だと思う。

私は、勉強がまだまだ足りないので、今後は勉強をしっかりと行い、まずは、十五年間支えてくれた両親、そして三年間授業をしてくれた先生方に恩返しができるよう、今までの感謝の念を胸に、前に進んでいきたい。さまざまな人たちとの関わりの中で。